

西堂古賀崎古墳に関する新知見

—墳丘・石室測量図の発見と単竜環頭大刀の詳細観察の成果—

岡部 裕俊（伊都国歴史博物館） 大谷 晃二（島根県立松江北高等学校）

1. はじめに

西堂古賀崎古墳は、糸島市西堂字深町に所在する横穴式石室を主体部とする後期古墳である。昭和33年の造成工事中に偶然発見されたことを機に原田大六による調査が実施され多くの副葬品が出土した（表1）。

古墳は、辛うじて破壊を免れ現地に残され、出土品は原田によって復元が施された後、一括して前原町教育委員会（当時）が管理することとなった。この一連の経過についてはすでに報告している（註1）。

原田は、事の顛末を前原町教育委員会に報告するとともに、調査の成果については後日に詳報する旨をその結びに記したが、生前にその成果が公表される機会は訪れなかった。

しかし、伊都国歴史博物館の平成22年秋季特別展として「昭和を駆けた考古学者原田大六」展を開催した折り、その準備のため原田の書斎を整理していると、製図を終えた墳丘図と石室実測図を発見した（註2）。調査からすでに半世紀以上が経過し、墳丘や石室の崩壊が危惧される現状では、発見当時の古墳の状態を知る貴重な記録であるので本紙で紹介することにした。

一方、出土資料のうち単竜環頭大刀について、平成23年度に保存処理を実施した。表面のクリーニングが行われた。その後、資料調査の機会を得た大谷晃二は、これまで十分ではなかった大刀の造作の細部について詳細にわたる観察を実施し、これにより多くの新たな知見を得ることができたので、その成果を報告する。

なお、1、2については岡部が、3、4については大谷が執筆した。

2. 墳丘と石室

（1）墳丘

墳丘は、造成工事の影響を受け東半部は大きく削り取られ、中央部に天井石を失った横穴式石室が露呈する状態となっていた（図1上段）。現況

で墳丘の高さは2.5mを測る。

また、墳丘の北裾は開墾されて畑になり、南裾は火葬場用地として削り出され、現状に近い状態になっていたことがわかる。

原田は、墳丘が比較的良好に残存する西裾部を墳丘裾部と推定し、直径20m程度の円墳に復元している（図1下段）。

（2）横穴式石室

埋葬施設は、主軸をN-2°-Wとするほぼ南北方向に向け、南に向かって開口する両袖式の横穴式石室である（図2）。

天井石は2枚の平石を並べて被覆していたとされ、現在も墳丘南斜面にへばり付いた状態で花崗岩の天井石1枚が残っている。

調査当時、前壁と、左側壁は旧状をしのぶことができる程度に石積みが残っていたが、奥壁の上部は損壊し、右側壁は袖部付近を残してほとんど抜き取られていた。

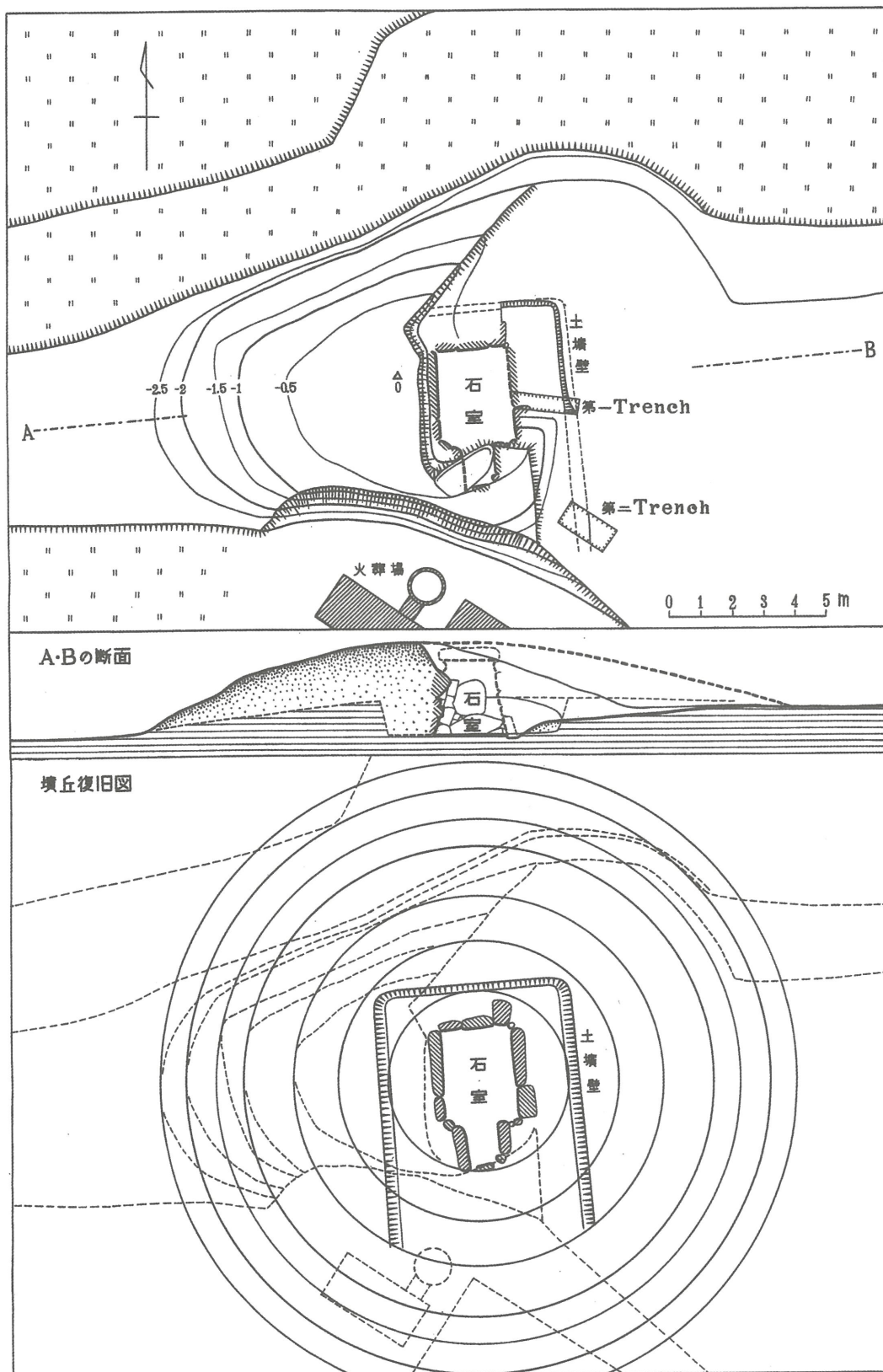
なお、羨道部は未掘のまま、現在も保存されている。

実測図から石室各所を計測すると、玄室の長さは左側壁で3.25m、右側壁では3.0m、幅は、前壁側で2.45m、奥壁で2.2m、を測る。石室の高さは、左側壁の様子から少なくとも3mほどはあったと推定される。

玄室の平面は長方形プランで、床にはやや大きめの平石が敷かれていたが、右半部では石材がみられず、石室の破壊時に一緒にはがされてしまったのか、その要因は明らかでない。また、床面には屍床なども認められない。

石室の周壁は花崗岩の転石や割石を用いている。石材の持ち送りは両側壁で顕著で、天井に向かって70度ほどの勾配で立ち上がり、天井部では幅80cm程度と著しく狭くなっていたと考えられ、その目地の通りから4～5段に積み上げられたと考える。

羨道部は、袖部から閉塞石までの長さ1.38m、



第1図 西堂古賀崎古墳の現況（上・1/200）と墳形推定図（下・1/200）
（原田大六氏作製）

幅95cm、高さ1.25mを測り、前壁から羨道にかけて、転石を横積みし一体的に構築する。

楣石は厚さ70cm、長さ150cm以上の角石1枚を架構し、さらにその上に平石を積み上げて前壁としていた。なお、この地域では梱石が羨道口床と袖部の両方に認められることが多いが、羨道口側の梱石が確認できていない。閉塞石よりも南側に敷設されているとみられ、羨道部の長さは、1.7mを超えるものと考えられる。

石室の閉塞は、花崗岩の平石1枚を立て掛けて行われている。この閉塞石の南側には、両側に貼石を施した墓道が続いており、以前は南側の火葬場に面した崖面に露呈していた。

石室掘方の深さは110～130cmに達し、掘方肩口は、石室石積み2段目の上面＝楣石基底面のレベルとほぼ同じ高さである。

(3) 小 結

西堂古賀崎古墳の埋葬施設は、単室両袖式横穴式石室で、糸島地方の6世紀の横穴式石室資料として貴重である。

当該期の横穴式石室構造の特徴は、前壁と羨道部を同一石材を一体的に積み上げ構築するところにあり、また、石室の持ち送りは側壁が顕著であるのに対し、前、奥壁は直立気味に立ち上がるのも特徴といえる。このような特徴を示す横穴式石室の初現例として想起されるのが鋤崎古墳である。鋤崎古墳では、板石を小口積みすることにより前壁と羨道を一体的（鋤崎古墳の報告書では『前庭部と玄室と区画する隔壁的』と表現されている）に構築しており、側壁の持ち送りが顕著である（註3）。鋤崎古墳の石室プランをベースとして使用石材の大型化、羨道の長大化を実践したものが6世紀代の糸島地方の横穴式石室といえる。

松浦一之介は桑原石ヶ元古墳群における横穴式石室構造の変遷について検討を行い、6世紀後半期に腰石を含む壁材の大型化が顕著となることを指摘し、さらに石室の掘方についてⅠ類（浅いグループ・20～80cm）と、Ⅱ類（深いグループ・100～250cm）に分け、前者から後者へ移行する見通しを示した（註4）。

西堂古賀崎古墳の築造時期は副葬資料から6世紀中葉と考えている。石室の使用石材は腰石が大型化し、石室の掘り方は深さが1mを越えていて、

松浦が指摘する石室構造の後出的特徴を示しており、古墳の築造推定時期と齟齬はない。

西堂古賀崎古墳と築造時期、立地等が近い砂魚塚1号墳（註5）や飯氏B-14号墳（註6）、谷上古墳（註7）などの石室と比較してみると、横穴式石室の床面は墳丘裾よりも高い位置に構築される傾向が顕著であることから、西堂古賀崎古墳の墳丘裾も石室の床面よりも低い位置にめぐる可能性が高い。この場合、原田が墳形推定の根拠とした墳丘西側の傾斜変換地点は墳形を円墳とする根拠には乏しいことになる。

墳形について注視されるのは北側の畑との境界に現れた前方後円墳のクビレ状の傾斜変換線である。当該古墳を前方部を東に向けた前方後円墳であると推定する根拠の一つであり、この検証は発掘調査により十分に可能である。

今後、西堂古賀崎古墳の墳形を確定し、将来に向けた保存措置を円滑に図るため、早期に確認調査を実施する必要があるだろう。

註

- 1) 岡部裕俊「西堂古賀崎古墳」『井原地区周辺の古墳群』1994前原市教育委員会
- 2) 岡部裕俊「昭和を駆けた考古学者原田大六」2012伊都国歴史博物館
- 3) 杉山富雄『鋤崎古墳』2002福岡市教育委員会
- 4) 松浦一之介『元岡・桑原遺跡群2』2003福岡市教育委員会
- 5) 岡部裕俊『荻浦』1995前原市教育委員会
- 6) 米倉秀紀他『飯氏古墳群B群第14号墳』1998福岡市教育委員会
- 7) 菅波正人『谷上古墳』1997福岡市教育委員会

表1 西堂古賀崎古墳出土副葬品一覧

装身具	銅地金張耳環1、碧玉製管玉11、銀製空玉4、ガラス丸玉85
武器	単竜環頭大刀1、直刀3、鉄鏃106本以上、胡録金具1組（吊金具）
馬具	鉄地金銅張f字形鏡板付轡2組 鉄地金銅張剣菱形杏葉2、素環鏡板付轡1組、鞍金具1、鉸具2、吊金具2、辻金具19他
農工具	袋状鉄斧1、刀子5 鉄鋤先1
土器	須恵器計17点（子持台付壺 他） 土師器計4点（黒塗台付壺 他）

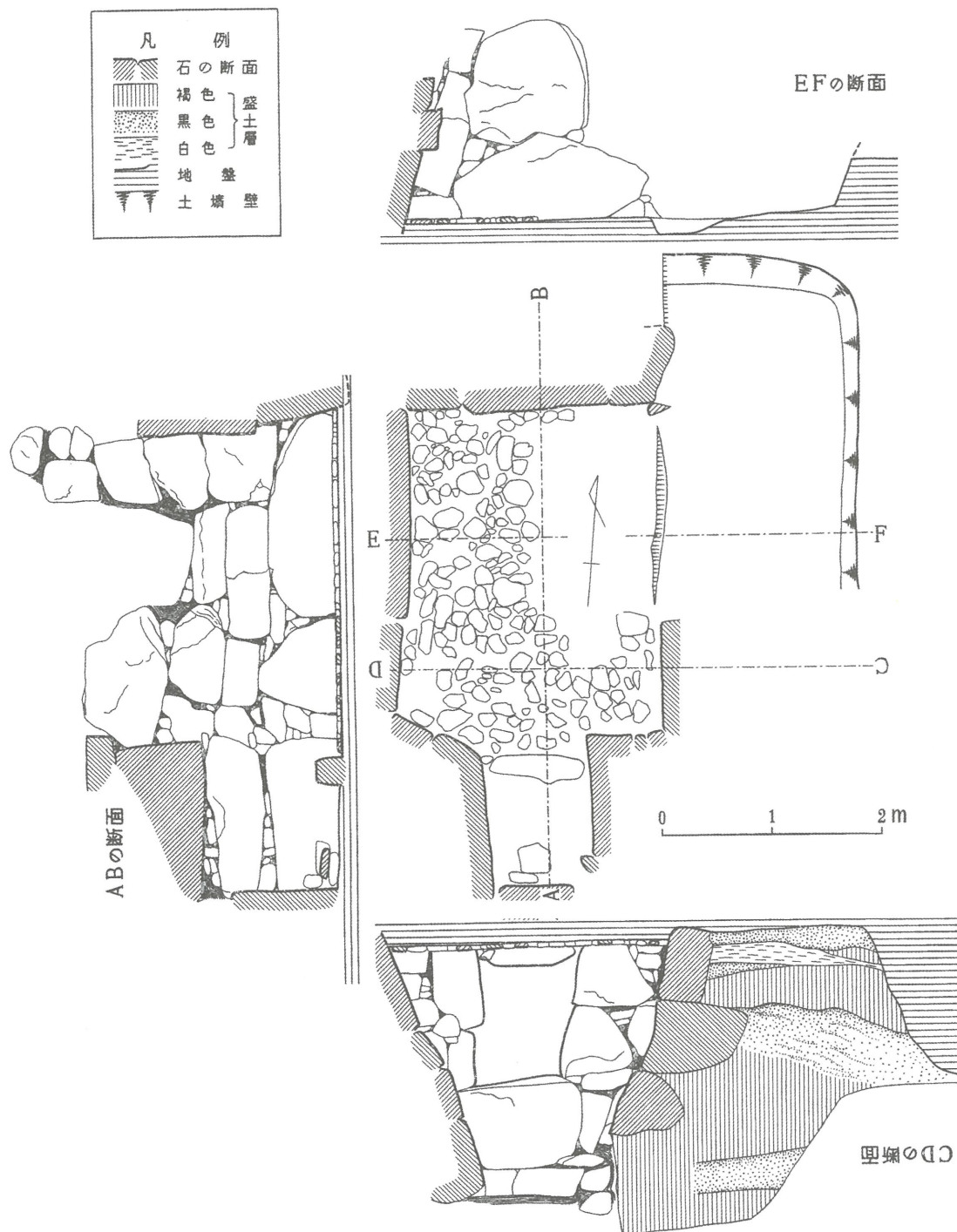


図2 西堂古賀崎古墳の横穴式石室実測図 (1/60)
(原田大六氏作製)

3. 単竜環頭大刀

(1) 現状

金銀装の単竜環頭大刀である。柄頭と、柄間から刀身までの2つに分かれて遺存し（写真1）、保存処理が施されている。大刀の拵えは、柄頭が鋳銅製金張・鍍金であり、柄頭筒金具の銅地金張責金具、柄間の銀線巻、銀製の柄縁金具が遺存している。鞘には鞘口金具や鞘尻金具は残っていないが、佩表に鞘飾金具（伏金具）の残片が遺存している。今回、大谷はこの大刀を観察する機会を得て、鞘飾金具の構造の詳細を知ることができたので、その知見を中心に報告したい。なお、大刀の各部の名称は図5に示した。

(2) 柄頭

柄頭（図3）は、中心飾りと環部を一体鋳造した鋳銅製で中心飾りは鍍金、環部は金張りで装飾する。環の下端には、柄頭筒金具に伴う責金具のみが遺存し、環頭茎が露出している。環部横径7.36cm、環部から茎先端までの長さ13.0cm、環部の厚さ9.8～12.0mmである（細部の計測値は図3に記した）。

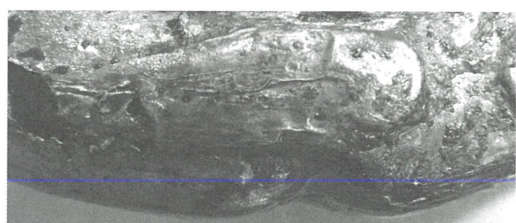
中心飾り 中心飾りの竜は冠毛の一部と、上顎の一部から目にかけての部分が欠損し、全体に錆が著しいため、細部の加工については観察困難な点が多い。上顎と下顎の先端はそれぞれ上下に反り、牙や歯の表現はない。顎ひげの表現もあるが、毛を表現する刻みはない。顎の付け根から頸毛がのび、ここのみに沈線で毛を表現する。舌はまっす

ぐ伸びて先端は上に巻く。冠毛は本来3本あったが、先端の1本が欠損し、冠毛にも毛の表現はない。後頭部に角が伸びる。目は欠損しているが、眉毛があり、やはり毛の表現はない。眉毛と冠毛の間は円形の孔があく。これは本来は角と眉毛の間の隙間の表現であるが、完全に形式化している。眉毛の後方には耳があり、菱形のくぼみを刻む。

写真1 単竜環頭大刀残存状況

中心飾りの表現手法は、上顎の断面は三角形で立体的であるが、下顎、舌、顎毛は扁平な板状の表現である。同様に、冠毛から角は同じ面をなす扁平な板状に表現される。こうした表現は、穴沢啄光分類の岩田系列・一須賀系列・弓矢系列（穴沢1986）に見られる手法であり、大谷は一須賀様式と呼んでいる（大谷2006）。

環部 環部には、喰合型の走竜文、つまり、すれ違った二頭の竜の頭部から尾までが表現されてい



①②は右向きの竜の頭部分。③の前肢が④では雲気状に変形している。

写真2 環部の走竜表現の比較

①③岩田14号墳 ②④西堂古賀崎古墳

る。大谷の走竜文の分類では、喰合型ⅢDである(註1)。

竜の頭部は、上顎、下顎ともに表現され舌がのびる。目、耳、眉、冠毛、角などもきちんと表現されているが、図像自体は、簡略化が進んでいる。上顎部分の表面は3つのくぼみをもつ波打った形となっているが、これは竜の上顎先端の反りと、顎中央の反りあがった牙(獠牙)による唇のめくれの表現が形式化したものである。

後肢はそれぞれ2本あるが、前肢は1本ずつしか表現されていない。頭部角の後方に雲気状の表現があるが、これは古賀崎刀の環部表現と同じ構図をもつ岡山県岩田14号墳単竜環頭と比較すれば、本来は前肢の1つであったことがわかる(写真2-③、④)。

環部の頂部には楕円形の出っ張りがあり、一須賀様式に見られる特徴である。

環部は金張りである。環部の中央には幅1mm程度の細い凸帯がめぐる(巻頭図版1-⑤)。これは鑄造時の原型をつくる合せ型または鑄造時の合せ鑄型の合わせ目の痕跡(Parthing line)とする説がある(金2013)が、一方で環部を包んだ金板の合わせ目であるとの反論もある(李2013)。

環部には赤色顔料が付着している(巻頭図版1-⑤)。同様の状況は、貴金具にも見られる。柄頭に赤色顔料が付着する例として、大阪府一須賀W1号墳の単竜環頭大刀があるが、これらが意図的に塗られたものなのか、それとも副葬時の状況から付着したものかはわからない。

環頭茎 環部下端から長さ11cm弱の茎が伸びる。しかし、X線写真(写真7)によると、本来の環頭茎は長さ1.5cmほどの短いものであり、これを長さ11cm弱、厚さ5mmの2枚の鉄板で挟

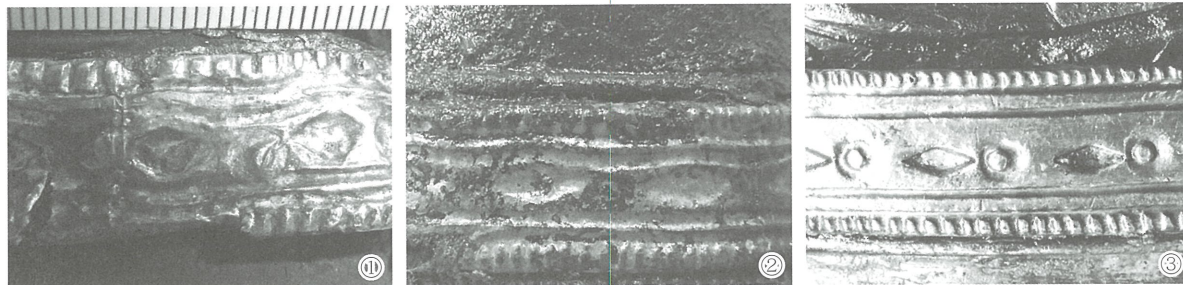
み、2本の鉾で固定して長い茎を作り出していることがわかる。この状況は茎全体が木質で覆われているため、肉眼では観察できない。なお、この長い鉄製茎の先端付近にも一か所、直径2mm弱の鉾で留めた状況が見られる。これが柄木と茎とを留めたものである可能性が高いが、目釘自体は極めて細く小さい(岡部編1994)。

(3) 柄

柄は断面八角形で、柄頭筒金具の貴金具と柄間の銀線巻、銀製の柄縁金具がのこる(図4)。

貴金具 柄頭に接して、柄頭筒金具に伴う貴金具が残るが、柄頭筒金具そのものは残っていない。貴金具は、幅9.5mmの銅地金張り製である。柄頭の環部と接する部分は、U字形に刳り込みが作られ、柄頭の環部がはまるように作られている。

文様は、縁に双連珠文を刻み、その内側に沈線、さらに円文と菱形文という構成である。双連珠文の刻みのピッチは、5mmで5つである(写真3-①)。円文は、中央凸部の円が偏っている(巻頭図版1-⑥~⑧)。これは工具先端の形状を反映したものか、または施文時の工具の当て方によるものと考えられる。また、沈線と円文の切り合いから沈線→円文の順に施文されている(同一⑦)。円文・菱形文を挟む両側の沈線は、円文・菱形文に沿って蛇行している状況が特に佩裏側で顕著に見られる(写真3-①)。貴金具は佩裏側の破損が著しいが、貴金具の幅自体に歪みがない部分でも蛇行しており、佩表側でもわずかながら蛇行している状況が認められる。同様の例は千葉県山王山古墳の単竜環頭大刀にも見られる(同一②)。この原因は、平行沈線を刻んだ後に円文・菱形文を打ったため、それに押されて沈線が歪んだものと考えたい。しかし、そこまで沈線が歪む



①と③の円文は中央の凸円が偏っている。①と②は平行沈線が大きく蛇行している。

写真3 単竜環頭大刀の貴金具の施文(目盛りは0.5mm) ①西堂古賀崎古墳、②山王山古墳、③岩田14号墳

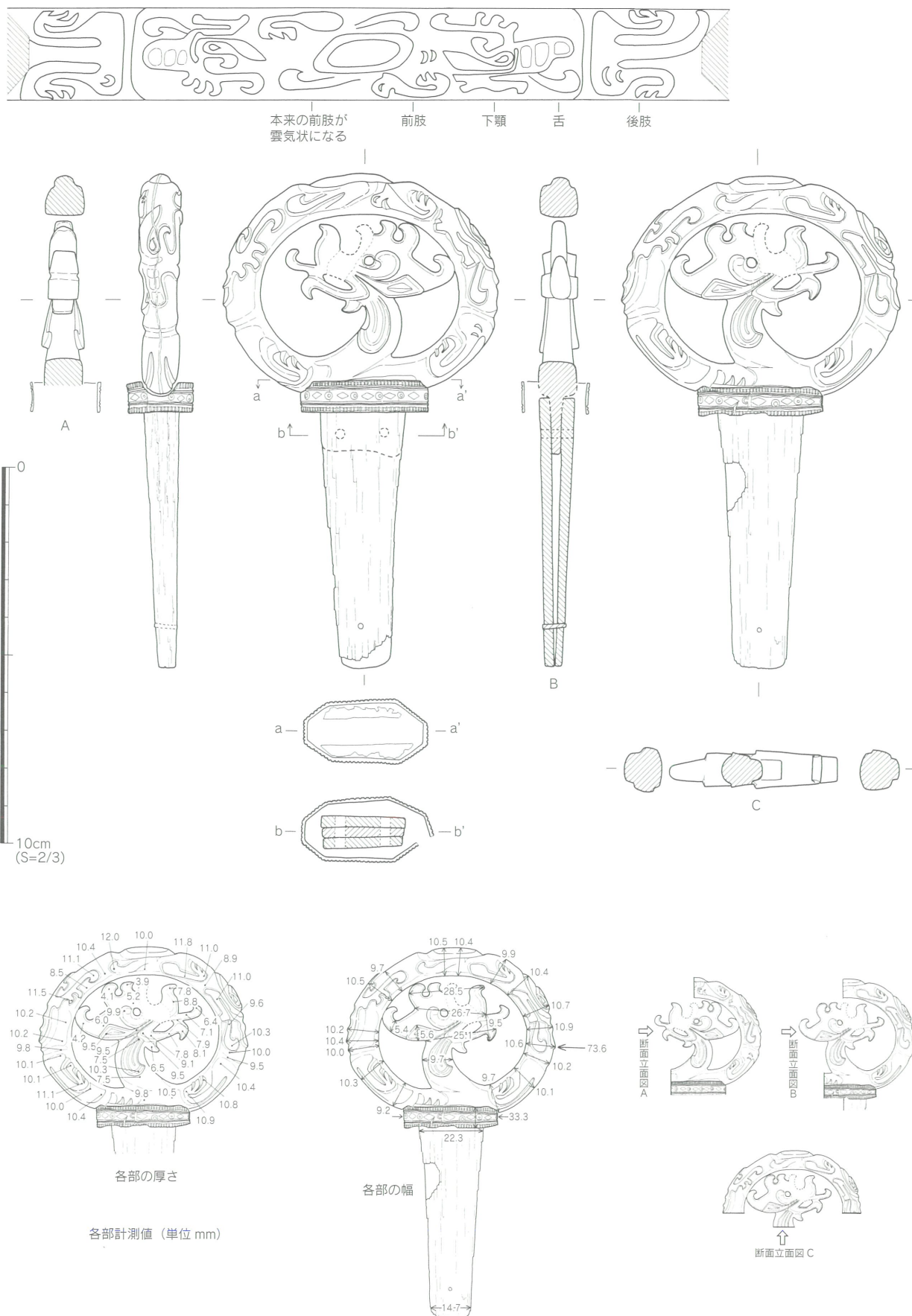


図3 西堂古賀崎古墳 単竜環頭大刀実測図 (1)

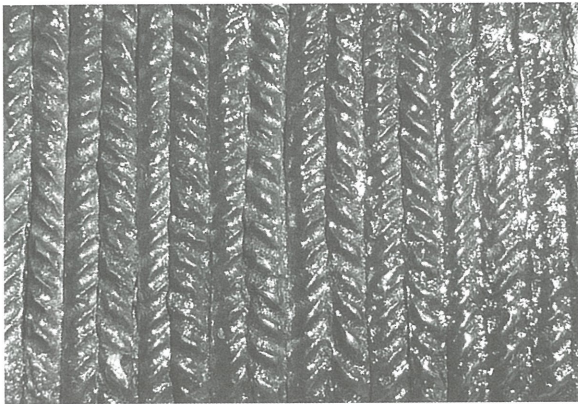


写真4 柄間の銀線巻

ものなのか疑問ものこる。

佩裏側の貴金具表面には地板である銅板のつなぎ目と見られる部分が観察できる（巻頭図版1ー⑦）。ここで円文の一部が切れていることから、銅板に文様を施した後に八角形に成形して鑲付けし、その後、銅板を金板で包んだものと考えられる。貴金具の文様にシャープさが点も、銅板に施文後に金板を張り、文様を押し込んだためと考えられる。貴金具の裏面には金板を巻いた端部が観察でき、表面の刃側には金板の重なり部分が見える（巻頭図版1ー⑧）。

この貴金具の内側にあたる柄木の柄頭小口面は、現状では修理のための黒色の樹脂が充填され、柄木端面に銀板の小片が貼り付けられているようである。修理前の本来の状況は未確認である。

柄間と柄縁金具 柄間から柄縁までが遺存し、すべて断面は八角形である。柄間から柄縁金具までの残存長は約10cmである。

柄間は幅28.5mmでそこに幅1.1～1.5mmの銀線を巻く。銀線には斜めに刻みが施され、刻みの方向の異なる2本の銀線を並べて巻いている（写真4）。刻みのピッチは5mmで4～5つである。巻き方向は、柄頭側から見て時計回りに巻く。銀線の断面は、扁平でも高いカマボコ形でもなく、やや扁平なカマボコ形である。銀線巻きの表面は、現状では黒漆を塗ったように黒光りしている。これが本来のものか、保存処理の結果であるかはわからない。銀線端部の処理・固定の仕方は確認できていない。銀線が脱落した箇所には、柄木に銀線の圧痕がのこっており、漆などの接着剤を塗って銀線を巻いていた可能性もある。

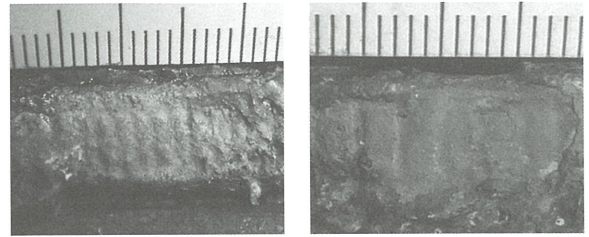


写真5 刻目帯の刻み（目盛り0.5mm）

柄縁には銀製の金具（長さ3.4cm、幅2.9～2.8cm、厚さ1.69cm）が取り付けられている。柄木の刃先側の小口は錆で覆われており、この部分の銀板の詳細はわからない。小口部分にも銀板が認められるが、これが銀板の厚みを示すのか、それとも小口端に銀板を折り曲げたり、小口全面を覆っているものかは確認ができなかった。

（4）鞘

鞘木の本質は、刀身の大半の部分で遺存しているが、鞘木本来の表面をのこす部分はほとんどなく、刃先から16cm付近にそれらしい部分が確認できるのみである。佩表側に鞘飾金具（伏金具）が部分的に残存する。鞘口・鞘尻金具は脱落したのと考えられ遺存していない。鞘中筒金具は後述の鞘飾金具ののこり具合から考えて、本来からなかったものとしてよい。鞘全体を包む銀板のような金属板の痕跡もまったく見られず、本来からなかったものと考えられる。ただ、鞘飾金具が遺存している周辺は、淡黄褐色の膜状のものが厚く覆っている。一部鞘飾金具を覆う部分もあるが、鞘木と鞘飾金具の間にあるように見える箇所もある。これは錆の可能性もあるが、表面が滑らかな膜状を呈しており、鞘表面を皮革で包んでいた可能性はないであろうか（後述の4、(4)参照）。

鞘飾金具（伏金具）の現状 鞘の佩表の中軸線上には、本来は細長い鞘飾金具があったことがわかる。現状では、わずかな断片となっているが、後述するように複雑な構造の装飾を復元することができた。まず、遺存した断片の状況は次のとおりである（巻頭図版2）。

a) 鞘木の中央に幅4～5mm、厚さ1mm弱の銀板（註2）が取りついている。この銀板の表面には刻み目が施されている（以下、この部分を刻目帯と呼ぶ）。刻みのピッチは5mmで7つの箇所と5つの箇所がある（写真5）。

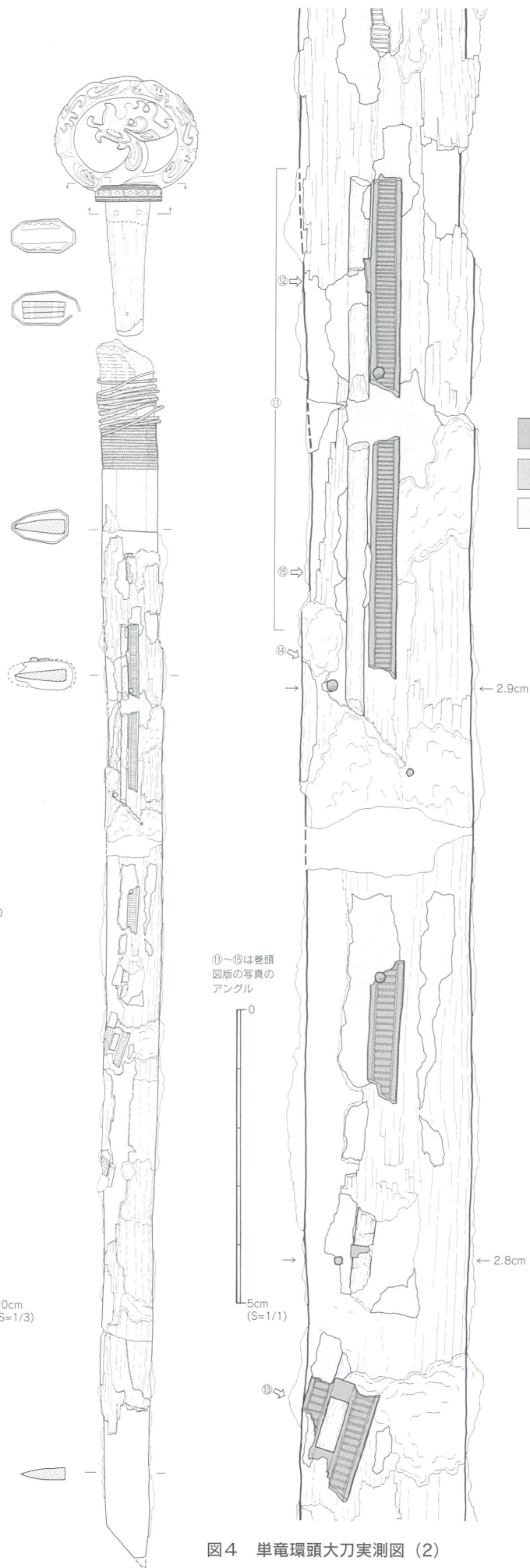


図4 単竜環頭大刀実測図 (2)

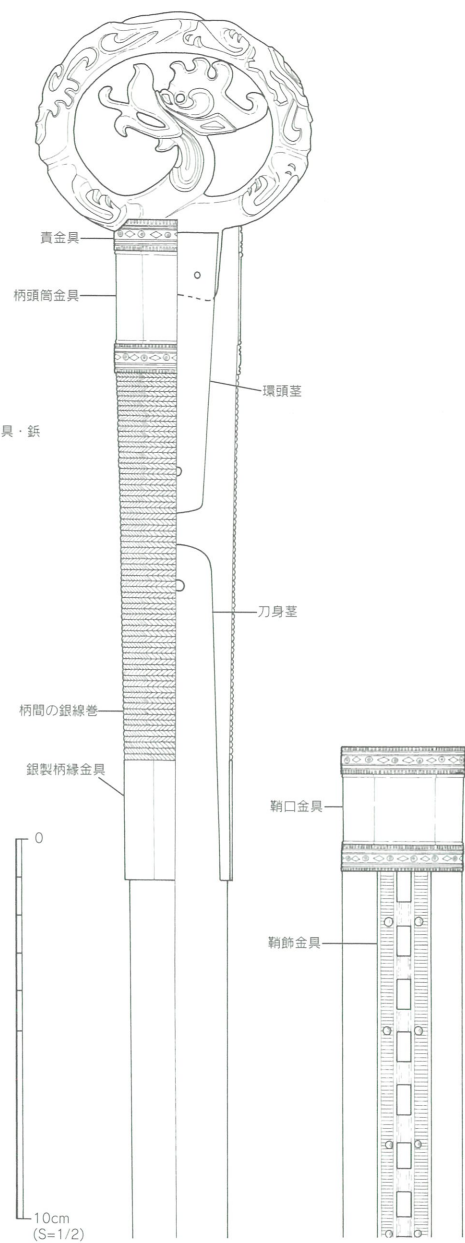


図5 復元想像図

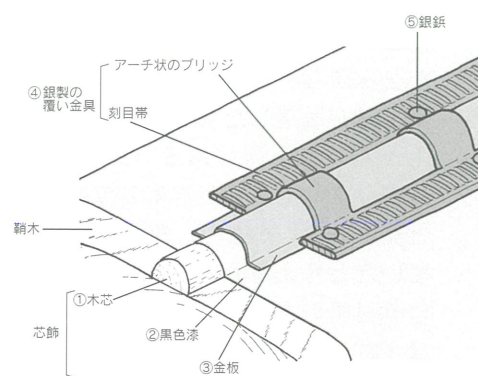


図6 鞘飾金具構造模式図

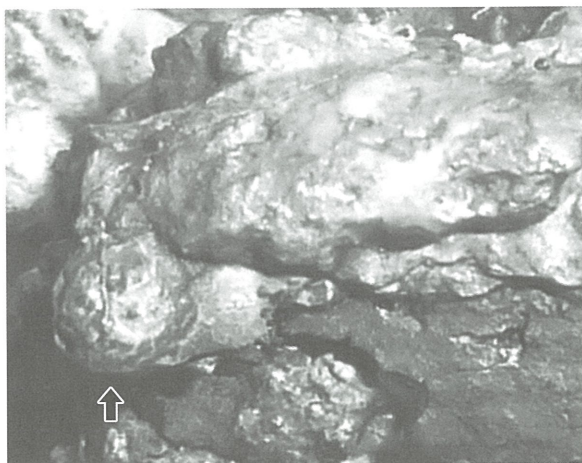


写真6 銀製の鉾頭 (矢印)

- b) これに沿って、刃側に幅3.5～4.0mm、厚さ2mmの断面カマボコ形の木(木芯)が取りついている。
- c) この木芯の刃側にも、a)と同じ刻目帯が取りついている。これはほとんど脱落しており、わずかに2か所のみ残っている。
- d) 刻目帯が残っている部分を見ると、鞘中央の刻目帯と刃側のそれとが、アーチ状の銀板でつながっている状況(ブリッジ)が観察できる(巻頭図版2-⑬)。このブリッジは、破損しており、折れた付け根を含めて4か所で確認できる。折れた付け根を見るとブリッジの幅は約6mmである(同-⑫)。木芯との位置関係から、このアーチ状ブリッジは木芯の両側の刻目帯をつなぎ、木芯の上にかぶせられていたと考えられる。なお、このブリッジに刻み目があるか否かは、遺存状態が悪くわからない。
- e) 木芯と刻目帯との隙間に金板の断片が見える(同-⑮)。この金板は、後述するように本来は木芯を覆っていたものと考えられる。金板で覆った木芯を以下、「芯飾」と呼ぶ。
- f) 6か所で銀鉾が確認できる。その場所は、刻目帯の上に3ヶ所、芯飾刃側の刻目帯が脱落した2ヶ所(同-⑭矢印A)である。もう一ヶ所も、刻目帯が脱落した所であるが、刻目帯の延長線上からずれた所にある(同-⑭矢印B)。これは現存する刻目帯が本来の位置からずれたためと見られる。つまり、刻目帯は銀鉾で留められていたと考えられる。銀鉾の頭が残っているのは刻目帯の上のこる2ヶ所のみであり、鉾頭は半球形で直径2.3mmである(写真6)。他は

鉾頭が脱落し、軸(直径1.5mm)が露出する。
g) これらの金具が脱落した箇所では、鞘木の表面と木芯の表面に黒漆が塗られている状況を見ることができる(巻頭図版2-⑫)。

鞘飾金具の復元 以上の状況から、この鞘の鞘飾金具の構造を復元すると以下のように考えられる(図6)。

- ① 鞘木に断面カマボコ形の細い木(木芯)を1本置く。
- ② その上から鞘木全面に黒漆を塗る。
- ③ 木芯の上に金板を張り、芯飾とする。
- ④ 2本の刻目帯をアーチ状のブリッジでつなげた銀製の覆い金具を芯飾の上にのせ、これで金板をおさえる。



写真7 柄頭のX線画像

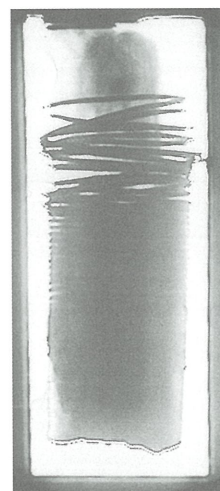


写真8 柄間・刀身茎のX線画像

⑤ 覆い金具を銀鉾で留める。

復元される覆い金具の幅1.35～1.4cm、刻目帯の幅約4～5mm、ブリッジ幅約6mmである。副葬後の経年変化で、この鞘飾金具は鞘木からはずれ、刃側に大きくずれたものと考えられる。

(5) 刀身

刀身は切先まで遺存するが、茎は関の部分で折れており、詳細な作りは不明である。切先から7cmの範囲を除いて、あとは鞘木の断片で覆われている。刀身の刃先はカマス切先である。

刃部の現存長52cm、復元長52.5cm、元幅約2.5cm、先幅2cmを測る。

4. 竜鳳文環頭大刀の鞘飾金具（伏金具）について

(1) 問題関心

筆者は、日本出土の単竜・単鳳環頭大刀の製作地や工人集団を復元するために、金銀装大刀の各属性の意匠や製作技術を比較して、工人の系譜や差異を明らかにしていく方法を試みている。ここでは、その属性の一つとして、鞘飾金具について考えてみたい。

(2) 類例

古賀崎刀のように断面カマボコ形の芯（芯飾）の上に透かし模様のついた覆い金具を重ねる鞘飾の類例として、韓国武寧王陵の単竜環頭大刀、大阪府海北塚古墳の単竜環頭大刀、大阪府塚原P1号墳の大刀がある（写真9・図7）。

武寧王陵刀（李2006）は、鞘の佩表に金板に

よる半管状の飾り（芯飾）を起き、その上に銀製の覆い金具を重ねる。この覆い金具は、斜線と平行線の細かい刻みを入れた刻目帯が両側辺にあり、それをX字形のアーチ状ブリッジを鑢付けしてつないでいる。このブリッジにも細かい刻みが施されている。覆い金具は、左右それぞれ34個ずつの金製円頭鉾で鞘に固定されている。

海北塚刀（梅原1937）は、覆い金具のみが鞘木から脱落して遺存する。覆い金具のブリッジがアーチ形であるため、武寧王陵刀や古賀崎刀と同様に芯飾があったと思われる。覆い金具の幅約1.3cm、刻目帯の幅約4mm、ブリッジ幅約5mmである（註3）。

塚原P1号刀（高槻市史編さん委員会1973）も同様に覆い金具のみが遺存するが、本来は芯飾を伴うものであろう。塚原P1号刀の覆い金具は方形の透かしが2列並ぶ形であり、芯飾が2本あったことがわかる。両端には鉾留め用の孔がある。刻目帯とブリッジともに平行線の細かい刻みを施す。覆い金具の幅1.9cm、左右の刻目帯の幅4mm、中心帯の幅約1.5mm、ブリッジの幅3.5mmである。

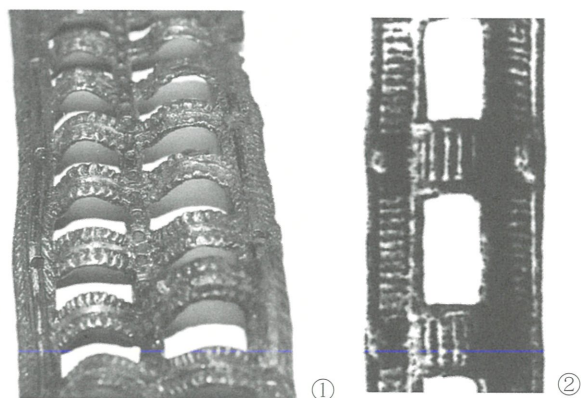
なお、塚原P1号墳からは、異なる拵えの2振の金銀装大刀が出土している。A刀（単竜環頭＋八角形の金銅製筒金具＋八角形の双連珠文金銅製責金具）とB刀（伽耶的な竜文の浮彫をもつ銅地金張鞘口金具＋双連珠凸魚々子文銅地金張責金具）である。A刀の金具類は断面八角形であり、B刀のそれは倒卵形である。筆者は、覆い金具はB刀に伴うものと推測するが確証はない。

古賀崎刀の鞘飾金具は、覆い金具の形状、刻目帯の刻み、法量の点で海北塚刀に類似する。両刀の刻みは、武寧王陵刀や塚原P1号刀と比べると粗いものである。

(3) 鞘飾金具の類型

韓国と日本出土の5～7世紀の竜鳳文環頭大刀の鞘飾金具には以下の4種類がある。

突帯式（図7－①） 刻み入りの金板の飾りを付けた突帯状のもので、断面蒲鉾形のもの。韓国昌寧校洞10号墳の金銀装竜鳳文環頭大刀は、金板を半管状に折り曲げて突帯を作り、その両側を細かい刻みを入れた銀板で押さえ、菱形の金銅鉾で留めている（穴沢・馬目1975）。韓国玉田M3



①塚原P1号墳

②海北塚古墳（梅原1937より）

写真9 鞘飾金具（伏金具）の類例

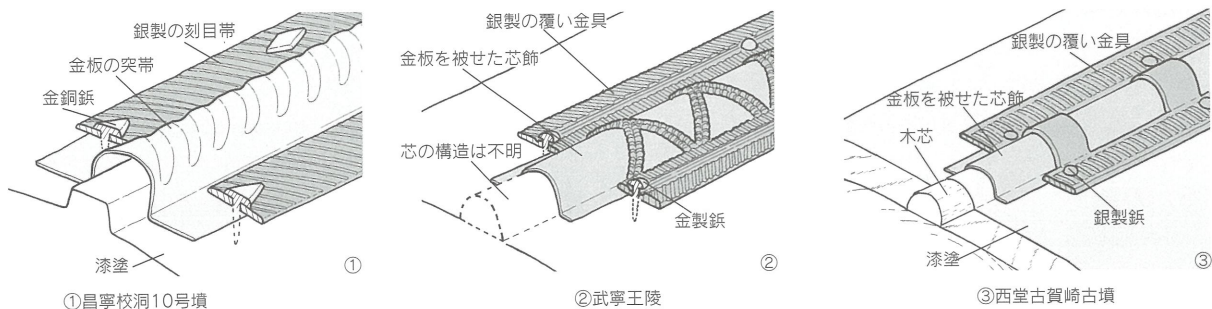


図7 竜鳳文大刀の鞘飾金具（伏金具）の類例

号墳の竜鳳文環頭大刀Aと同大刀Bも遺存状態は悪いが、同様に断面蒲鉾形の刻み入りの金板装飾がある（趙・朴1990）。また、韓博2号刀（竜鳳文環頭）は「銀板に二本の金棒を金糸で縫い銀の菱鉾で留め」という（穴沢・馬目1976）。

覆い金具式（同②③）断面蒲鉾形の芯（芯飾）の上に透かし模様のついた覆い金具を重ねるもの。先述のとおり、武寧王陵刀、海北塚刀、塚原P1号刀、古賀崎刀がある（註4）。

先の校洞10号刀は金装の突帯の両脇を銀板で留めていたが、その両脇の銀板をブリッジでつなげたものが覆い金具式となる。

透入金銅板式 方形や猪目形の透かしを入れた金銅板のもの。日本出土の単竜・単鳳環頭大刀などに見られる。

円形浮文金銅板式 円形浮文を施した金銅板のもの。双竜環頭大刀や頭椎大刀などに見られる。

（4）鞘飾金具の機能

突帯式や覆い金具式には刻みによる装飾が施されている。その由来は鞘を皮革や布帛で包んだ合せ目を金属板で隠したもので、金属に施された刻み目は、その縫目を表現したものと考えられる（末永1941、穴沢・馬目1975）。

確かに、後出する透入金銅板式や円形浮文金銅板式は、鞘木を銀板または金銅板で包み、それを鞘飾金具で留める機能を果たしている。こうしたことから、先の4種の鞘飾金具は、その機能の由来からは、伏金具・伏板と呼ぶべきものである。

ところが、突帯式と覆い金具式では、鞘を銀板等で包んだ確実な例を筆者は知らない。さらに透入金銅板式の中にも、兵庫県岡1号墳（樋口1961）、群馬県小泉大塚越3号墳（宮塚・三浦

1993）のように鞘を包む銀板のないものがある。

これらはもともと鞘木を包むものをもたず、鞘飾金具を直接鞘木に鉋留したものか、それとも皮革や布などの「何か他の腐りやすい材料を用いていた」（新納1982）のかが課題となる（註5）。古賀崎刀では、鞘の表面に黄褐色の物質が多く付着している。当初は錆の一種と考えたが、馬具などに残存する皮革に似ているようでもある。筆者には判断ができないが、鞘を包んだ皮革の可能性はないだろうか。

（5）鞘飾金具の系譜

先に覆い金具式は、突帯式に覆い金具を被せたものと考えて、両者には系譜的な連続性があると考えた。これに対して、透入金銅板式は、縫目を表現する刻みはなく、それ以前の竜鳳文環頭大刀には見られない猪目文を採用している。つまり、覆い金具式と透入金銅板式は意匠や構造に連続性がない。しかし、兵庫県窟屋1号墳の単鳳環頭大刀（池田編2009）には、方形透かしの両側に刻み目を入れた透入金銅板式の鞘飾金具がある。これを覆い金具式のブリッジと芯飾が省略されたものと考えて、覆い金具式→方形透入金銅板式→猪目透入金銅板式といった変遷が想定できるのか否かが、今後の課題である。

また、円形浮文金銅板式は、倭製と見られる双竜環頭大刀や頭椎大刀に見られることから倭で創出されたデザインであろう。

（6）まとめ

筆者は単竜・単鳳環頭大刀の製作工人のまとまりを復元するために型、系列、表現様式の設定を設けて検討した。その結果、比較的よくまとまっ

た一群の環頭として「一須賀様式」の大刀群を設定した（大谷2006）。西堂古賀崎古墳の単竜環頭大刀もこの一須賀様式であり、次の特徴をもつ。
①中心飾りの竜頭は冠毛から角までが板状に作られる。
②環部の走竜文は匙面状に削った太い凹線で竜を表現する。
③環部走竜文は喰合型Ⅲである。
④この様式の前半期のものは中心飾と環部を一体鑄造し、中心飾は鍍金、環部は金張りする。
⑤後半期のものは、一体鑄造で全面鍍金となる。
⑥環頭茎を鉄板で挟み、茎を接ぐものがある。
⑦合范（合せ鑄型）では製作できないものがある。

これらの特徴のうち、④⑥は伽耶式竜鳳文環頭大刀に類似する特徴である（大谷2006）。これらは柄頭の特徴であるが、今回、古賀崎刀の拵えに覆い金具式の伏金具が確認できたことで、一須賀様式の外装の一端を知ることができた。この覆い金具式は、系譜としては、伽耶式の突帯式の発展形態ではあるが、直接的には、武寧王陵の大刀を祖形とするものであった。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、穴沢啄光氏、金宇大氏、宮代栄一氏にはご教示と資料提供の協力をいただいた。また、写真資料の掲載にあたっては、赤磐市教育委員会、市原市教育委員会、高槻市教育委員会に許可をいただいた。記して感謝申し上げたい。

註

- 1) この大刀について、かつて喰合型ⅢAに分類した（大谷2006）が誤りであった。ここに訂正したい。
- 2) この銀板の破断面には緑青があり、銅板を銀板で包んだものとも考えたが、厚さがわずか1mmで、銅板と銀板の剥離面なども見えないことから、銀板と考えた。
- 3) 金具の計測値は新納1982の図から計測したものであり、あくまで参考値である。
- 4) この他に韓国飾履塚の竜鳳文環頭大刀の鞘飾金具は、「矢羽根様の透彫を施した細い帯を伏せて、菱形の金鉾で留め」ている（梅原1932）。資料を実見していないため、これが覆い金具式の類するものか否かの判断は保留する。
- 5) 山本湖舟は、『工芸美術聚英』第二年第七輯の中で、昌寧校洞10号墳の竜鳳文環頭大刀は、鞘木を皮革で包むことを記しているが、同大刀を観察した梅原末治の資料にはそうした記載が見られない（穴沢啄光氏の

御教示による）。原資料での確認もできていないため、判断は保留したい。

参考文献

- 穴沢啄光・馬目順一 1975「昌寧校洞古墳群」『考古学雑誌』第60巻第7号
穴沢啄光・馬目順一 1976「龍鳳文環頭大刀試論 - 韓国出土例を中心に -」『百済研究』7
穴沢啄光・馬目順一 1986「日本における龍鳳環頭大刀の製作と配布 - 一つの試論 -」『考古学ジャーナル』No.266 ニュー・サイエンス社
池田征弘編 2009『窟屋1号墳』兵庫県教育委員会
李漢祥 2006「武寧王の環頭大刀」『国立公州博物館研究叢書第18冊武寧王陵 出土遺物分析報告書（Ⅱ）』国立公州博物館
李漢祥 2013「陝川玉田M3號墳龍鳳紋大刀斗環部製作工程」『考古學探究』14號 考古學探究會（ハングル）
梅原末治 1932『慶州金鈴塚飾履塚發掘調査報告』（大正13年度古墳調査報告書第1冊）
梅原末治 1937『近畿地方古墳墓の調査二』日本古代文化研究所
大谷晃二 2006「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」『大阪府立近つ飛鳥博物館2004年度共同研究成果報告書』
岡部裕俊編 1994「付編西堂古賀崎古墳」『井原遺跡群 井原地区周辺の古墳群 前原市文化財調査報告書 第51集』前原市教育委員会
金跳咏 2013「大伽耶龍鳳文環頭大刀の外環製作方法と復元実験」『文化財と技術』第5号 工芸文化研究所
末永雅雄 1941『日本上代の武器』弘文堂
高槻市史編さん委員会 1973『高槻市史』第6巻考古編
趙榮濟・朴升圭 1990『陝川 玉田古墳群Ⅱ-M3号墳』慶尚大学校博物館調査報告6
新納 泉 1982「単龍・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号 史学研究会
樋口隆康 1961「網野岡の三古墳」『京都府文化財調査報告第22冊』京都府教育委員会
宮塚義人・三浦京子 1993『玉村町埋蔵文化財調査報告書第10集 小泉大塚越遺跡』玉村町教育委員会
山本湖舟（出版年不詳）『工芸美術聚英』第2年第七輯